

今日(11月5日)から11月10日まで、上海で「中国国際輸入博覧会」が開催されます。

これは昨年5月に習近平国家主席が「一帯一路」国際協力サミットフォーラムで発表したもので、世界各国との経済交流の強化と、中国市場を世界に積極的に開放することを宣言するものです。

国家主席肝いりの一大事業であるだけに、規模も、その準備も通常の見本市とは桁外れのものになっています。日本のマスコミではあまり取り上げられていないようなので、今回はこの巨大総合見本市についてレポートします。

平成30年11月5日

【第18回】『第1回中国国際輸入博覧会』について

【今日のポイント】

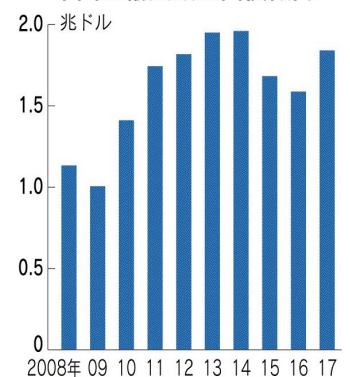
- ◆「第1回中国国際輸入博覧会」は、輸入に特化した世界初の博覧会。
- ◆バイヤーの数は16万社以上。各省、直轄市がテーマを決めてバイヤーを派遣。中国財政省から、会期中に取扱われる輸入品の税優遇が発表されるなど、国を挙げて成功への強い意志が感じられる。
- ◆一方で、初日に来場し開幕のあいさつをする習国家主席の上海訪問にあわせて、学校や周辺企業が休みになったり、地下鉄が運休になったりといった“中国らしさ”も健在。

1 中国の最近の輸入の傾向

中国税関総局の貿易統計によると、輸入額は、15-16年は若干落ち込んだものの、昨年からは再び堅調に推移しています。それを支えているのは、世界で販売される自動車の3台に1台は中国人が買っていると言われるような旺盛な内需と消費の高度化です。

最近では米中貿易摩擦の影響で若干の先行き不透明感も聞かれますが、中国政府は個人所得税の減税など素早く景気対策を打ち、少なくとも上海で見る限りは、中国人の購買意欲はまだまだ底堅いと感じます。

中国の輸入額は回復傾向



(注) 中国税関総署調べ

2 「中国国際輸入博覧会」とは？なぜ上海で行われるのか？

「中国国際輸入博覧会」は、上海西部のビジネスセンターとして再開発が進んでいる虹橋商務区の中核施設「国際会展中心」で行われます。この施設は展示可能面積50万㎡で、世界最大のコンベンション施設とされています。

今回、このような見本市を中国が開催するねらいとしては、上述の旺盛な国内の購買力を背景に、市場の開放の意思を内外に示したいという思惑とともに、輸入拡大による新しい国内経済の発展モデルを模索したいというところがあるようです。

参加バイヤー数は約16万社。各省や北京、上海など主要都市が各地域の重点テーマに沿ってバイヤーを派遣するという形をとっているのが通常の見本市との大きな違いです。

例えば、北京市はITC関連などを中心に4,700社を派遣。一方、地元上海市は省力化に資する生産設備や市民の消費の高度化に沿った安全安心な食料品や化粧品などを中心に約1万5千社が参加する予定です。

ちなみに、上海市だけで総額で約130億元(約2.2千億円)の仕入れを予定しているという発表もあり、さすが中国の富の5分の1が集まる中国経済の中心「上海」の面目躍如といったところで、このバイイングパワーがこの大イベントが上海で開催される理由との一つです。



会場となる「国際会展中心」(の一部) 見本市会場と言うより「要塞」?

3 日本企業、北九州市の企業は？

この巨大市場を目指し、今回80以上の国・地域から約3千社がここ上海に集まってきました。

その中でも最多の約450社が参加するのが日本であり、北九州市からも加工食品、ハイエンド・インテリジェント機器の分野で2社が参加しています。その一社から聞いたところ、実際の個別商談の設定を中国の大手銀行が事前に担うなど、成約を高めるための本気度・国を挙げてのサポートを実感されているようでした。